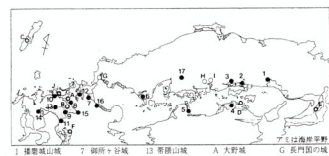


広島県の古代山城—長者山城・茨城・常城

向井一雄、山元敏裕（古代山城研究会）

【概要】広島県で古代山城の発見が相次いでいる。昨年三月、備陽史探訪の会と古代山城研究会の合同踏査によって福山市加茂町所在の「芋原（いもばら）」の大きい跡」と呼ばれる遺跡が『続日本紀』停止記事の備後の「茨城」と判明、広島県西半の安芸では、東広島市と広島市の市境で未知の古代山城である長者山城（仮称）が発見された。

西日本古代山城研究の現状



西日本の古代山城分布

1970年代の瀬戸内における古代山城の発見を受けて、1980年代には北部九州の「神籠石」の遺跡は、瀬戸内で新しく確認された遺跡も含めて「神籠石系山城」と呼ばれるようになり、神籠石系山城は16城となった。朝鮮式山城（天智紀山城、史書記載山城）と神籠石系山城（史書非記載山城）の両者には基本的に大きな違いはないため、近年では、「古代山城」として一括して捉えられるようになってきた。

2006年、鬼ノ城の城内発掘調査によって築城・維持された年代が7世紀第4四半期を中心としていることが明らかとなった。御所ヶ谷城や永納山城など文献に記録のない山城からも7世紀後半の土器が出土し、趨勢として文献に記録のない山城の築城も7世紀後半の築造とし、記録のある山城よりも新しいとする年代観が主流となってきている。古代山城の類型化研究では、規模、占地、石材、城壁走向、列石前面柱間隔、城内建物、門礎石などが編年指標であるが、「対外防衛」から「律令制化・地域支配」へという目的や機能差として段階的に築造されていったと捉えられ、新しい時代になるにつれ軍事性は低下していくと考えられる。天武朝に大宰・総領が置かれた地域に集中して古代山城が築かれており、西日本主要部である「筑紫」「周防（周防）」「伊予」「吉備」「畿内」には670～690年代に広域行政ブロックが敷かれ、山城はその大宰・総領制の核となったとみられる。

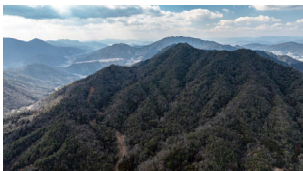
広島県における古代山城研究

『続日本紀』養老3年（719）12月条に「備後国の安那郡の茨城と葦田郡の常城を停む」と記されていることから、備後国の二城が同時に廃城になったことがわかる。常城については『和名抄』の葦田郡に都禰郷があり、広島県福山市新市町大字常が遺称地名とされ、亀ヶ岳が推定地となっている。茨城は地名からの手がかりもなく、江戸時代以来、長く未詳だった。1970年代以降、瀬戸内地域で次々と古代山城が発見されていたが、広島県西半の安芸国だけは古代山城分布の空白地帯として残されていた。

長者山城（東広島市・広島市）



長者山城 遠景（志和から）



長者山城 空撮（北から）



長者門 背面石築



長者門 前面列石



土段状遺構

東広島市教育委員会の石井隆博は赤色立体地図で長者門の遺構周辺を確認し、稜線に沿って人工的な地形改変痕跡の存在に気づき、2019年3月14日、古代山城と考えられる遺構を発見した。これを受けて古代山城研究会では2023年2月から8次の踏査を実施して、2024年1月28日に長者山城の詳細を報告した。

長者山城跡は、東広島市と広島市の市境に位置し、長者山（標高571m）から東北へ伸びる山地の先端一標高605メートルの無名峰にある。北と東南に尾根が伸びて形成された馬蹄形の山地の稜線外側に土段状の帯状平坦面（幅3～5m）が続いており、外郭線は周長2.4kmある。長者門は、標高516ピークと長者屋敷跡のある無名峰の間の鞍部に造られている。遺構は大きな石材を用いて、列石と一部石築で造られている。特徴的な加工として、正面右側の列石上縁部に幅約10cmの段差調整面加工がある。右背面は石築で構築されており、切り欠き加工（鍵形加工）が確認できる。

他の古代山城と比較すると、城壁の形は瀬戸内海の山城に共通点が多い「土段式」「折れ構造」だが、列石や石築の技術的な特徴は、瀬戸内と九州の中間的な石城山城や阿志岐山城と共通し、地形の取り込み方は瀬戸内に多い「鉢巻型」より九州に多い「傾斜回繞型」であり、瀬戸内と九州のハイブリッド的な特徴を持っている。

占地



嶮山城

緩山城

城壁走向



折れ

曲線

石壁



野面

割石

切石

門礎石

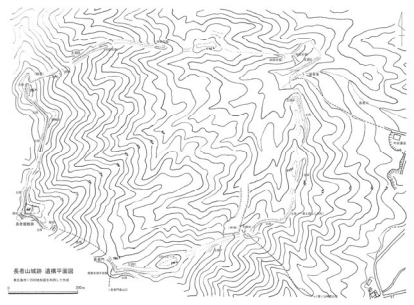


円柱

角柱



広島県の古代山城



長者山城 遺構平面図

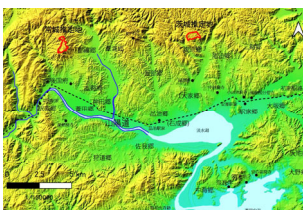


段差調整面加工



切り欠き加工

備後国の茨城（福山市）・常城（府中市）



茨城・常城 位置図



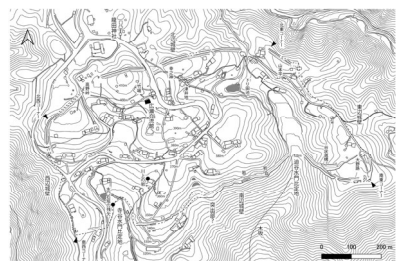
常城推定地（豊説・脇坂説）



常城（亀ヶ岳）空撮 南から

備陽史探訪の会が1985年頃確認した広島県福山市加茂町北山の「芋原の大きい跡」という伝承を持つ遺跡について、2023年3月13日、古代山城研究会は備陽史探訪の会と合同踏査会を行い、茨城の遺跡として発表した。遺跡は標高412mの準平原の要害地中に占地する。外郭線は山の9～9合目を鉢巻状にめぐり、周長は約3.1kmで古代山城の中では大型の部類に入る。外郭線の形状は、北辺が幅6.5m、高さ2.5mの内托土塁で、土塁の城内側に幅0.5～1.2mの城内通路が伴っている。巨人が大牛に犂を引かせて造ったという「大きい跡」はこの堀状の城内通路だった。南辺外郭線は土段状土塁（幅3～4m）で急斜面上に造られている。外郭線南側に二つの谷をまたぐが、後世の開墾によって水門石壁などは残っていない。城内には広い平坦地や湧水地が点在している。

1952年、豊元国は福山市新市町と府中市にまたがる亀ヶ岳（標高539m）で常城の遺跡を確認したと日本考古学協会で発表した。が、古代山城の調査が進んだ結果、豊説の遺構は古代山城ではないと考えられている。亀ヶ岳の南麓の府中市街では備後国府跡があったとされ、30年に及ぶ発掘調査によって、府中市街地北半に国府が存在したことが明らかとなった。国府建設は常城廃城以降だが、各地の古代山城に近接する国府の事例は多い。常城については1982年に脇坂光彦が七ツ池周辺の山頂部を城域とする新説を発表した。近年の踏査で山頂の七ツ池を囲む稜線に土段状土塁、土堤状土塁が確認されているが、遺構の残りが悪く断片的な残存状況である。七ツ池は江戸時代に造られた農業用の溜池で、常城の水門石壁などは溜池工事で破壊されたとみられる。



茨城推定地（芋原）平面図



茨城（芋原）内托土塁



茨城（芋原）空撮 南西から

【参考文献】
向井一雄2024「新発見の長者山城跡について」古代山城研究会 研究報告会『長者山城跡』
松尾洋平2023「古代山城「茨城」の実像を探る—合同踏査の成果から—」第65回「古代山城研究会例会予稿集」『謎の山城・茨城を探る—古代山城・茨城と芋原の大きい跡』